

9月22日(金) 私の授業(2号館402)

## リスニングと発音の指導

Teaching English Pronunciation and Listening Comprehension

国際武道大学 村川久子

## [背景]

国際武道大学の学生は一般教養の英語が必修で計10単位修得しなければなりません。授業はすべてLL教室で行われ1クラス約65名の編成です。本学の英語の objectives は4技能の中でも特に Listening と Speaking を中心に行い他の2技能は補習等で行います。

高校時代に武道や体育を中心に過ごしてきた学生が、英語が4年間必修という状況に置かれますのでかなりの戸惑いがあるのは事実です。心理的に英語の苦手意識が強く簡単な発話も教員の忍耐力が必要になってきます。たとえ発話がある場合でも殆ど聞き取りが不可能な程声が小さく4-5回は大きな声を出すよう助言しなければなりません。放課後の課外活動(全学生必修)では大きなかけ声が出せる学生ですので、何とか英語の授業でも大きな声で発話出来るように指導したいと願っています。

## [目的]

今回は Listening と発話を中心とした授業の中に発音指導をしている様子をご紹介します特に発声訓練、発音方法(無声の破裂音)と発音練習、そして発音分析を中心にします。特に無声の破裂を選んだ理由は摩擦、破裂音もありあらゆる子音は音の強さをよく表していることも事実ですが、この練習が一番音声のエネルギーが強く表される練習になるからです。/p, t, k/の帯気が長くしかもその持続時間が長いと非常にわかりやすい、強い、美しい発音になるように思えます。

[対象と方法] A.授業時間(90分)、B.学級定員(60名)、C.実施及び事例及び事例クラス(国際武道大学体育学部武道学科3年生、水曜日、2時限(10:50-12:20))、D.使用教材{(1)PROTS (Pronunciation Training System)、PROTS テキスト(村川久子著)、レーザーディスク(村川久子監修)、アナライザー(村川久子監修)、(2)Break Through Book 3 (J.C.Richards, M.N.Long)}、E.主眼点(発声訓練、発音方法、発声練習、発音分析、大意把握)、F.使用教室(LL教室1421, LL準備室1522)、G.指導時間(発声練習-約5分、発音方法-約5分、発音練習-約20分、リスニング-約60分、発音分析-約1時間)。

## (授業方法)

授業のはじめに一人ずつ発声練習のためにアルファベットまたは英語で数字を発音させる。次に PROTS テキストで [p, t, k] の発音方法を説明しレーザーディスクで実際に日本人と米国人の発音方法の相違を紹介する。

9月22日(金) 私の授業(2号館402)

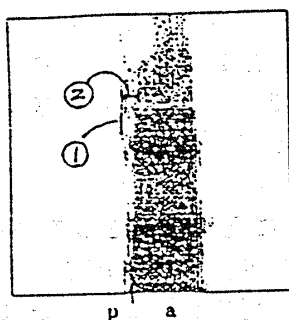
それから各自で発音の練習をする(今回はティシュペーパーを用いティシューが大きく動くと帯気が強いのでその強さを確認させる)。一応発音の練習を終えると Break Through Book 3 の unit の Listening の部分のテープを流しテキストを見せないで note taking をさせその直後客観的な質問をする。この unit の Work Book を練習させ授業を終了する。

## [発音分析]

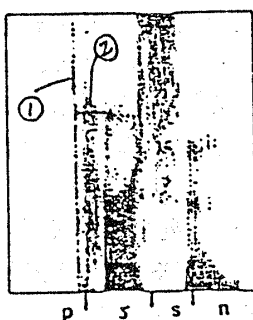
放課後学生は課外活動(必修)があるので分析は小人数に分けアナライザーが設置してあるLL教室で行う。分析方法は下記の通りです。

ボイスパターンの画面にどう表れるか

日本人の [p-] (パ)



アメリカ人の [p-] (person)



- (1) 破裂の線。PROTS アナライザーによるボイスパターン(声紋)の画面では、破裂の部分が縦に1本の線として表れます。この線がはっきりと濃く出ているほど強い破裂音を示し、不明瞭であれば弱い破裂音を示します。上の例でも、破裂を示す縦の線に違いが表れています。アメリカ人の[p-]音(右図)は唇をしっかりと閉じてから破裂させますので、はっきりと濃い線が表れています。
- (2) 帯気の部分。ボイスパターンの画面では、破裂後の横軸時間の影が長ければ帯気が長いことを示し、短ければ帯気が短いことを示します。上の例でも、アメリカ人の破裂は日本人の破裂よりも強いので、この影の横軸の幅が長くなっています。